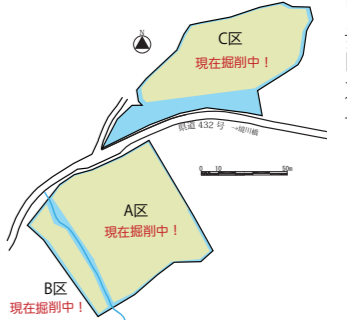


かみ 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査

A区の調査を進めています。

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では、A区上空撮が終了し、発掘調査もいよいよ後半戦に突入しました。今号では、A区の周堤が残る竪穴建物跡の現在まで判明している調査成果をお伝えします。



A区で検出された周堤の残る竪穴建物跡(写真2)は、同じ建物内に対して、三面の硬化面(住居の床面)と焼土面(火床)があることが確認されました。このことから、最低二回は住居の床面が作り直されていたと考えられます。そして、一番最後に作り直された床面からは、弥生時代中期後葉の甕が出土しています(写真3)。これらの土器は、土石流に覆われていたこともあり、他の時期の土器などが混入しなかったため、竪穴建物跡の廃絶時期が明確にわかる貴重な事例と考えられます。また、これらの土器には、炭化物(スス)が付着していることから、今後の分析によっては、土器の年代や何を煮炊きしていたのかが分かる可能性があります。

現在、周堤の残る竪穴建物跡は、二面目の床面の検出をおこなっており、まだ下層にも三面目の床面があるため、今後も新しい発見が期待されます。(田中良)



写真2 周堤の残る竪穴建物跡検出状況 南東から



写真3 周堤の残る竪穴建物跡内の土器出土状況 南西から

しものべさか 下延坂遺跡の調査

B区の調査を進めています。

川向にある下延坂遺跡では、調査区の南側にあるB区の調査を進めております(写真4)。

B区で確認された主な遺構は、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての竪穴状遺構四基(写真5)、土坑一五基のほか、調査区西側に弥生時代中期後葉の土坑一基がみつかりました。弥生時代中期後葉の土坑は長径一メートル、短径八〇センチ、深さ一〇センチほどの平面が楕円形をしており、中から弥生土器の深鉢が出土しました。この土器の口縁部の内面には、櫛状の工具によってつけられたと考えられる刺突の列点文があります(写真6)。本遺跡では初めての弥生土器の出土で、大変興味深いものです。(蔭山誠一)



写真4 20B区の作業風景 北より

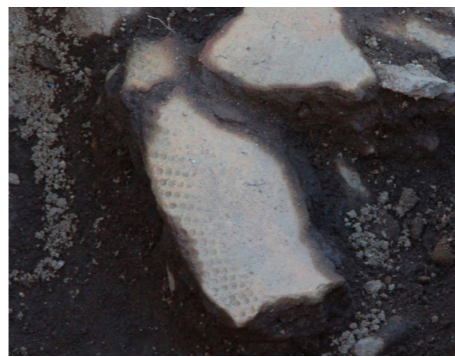
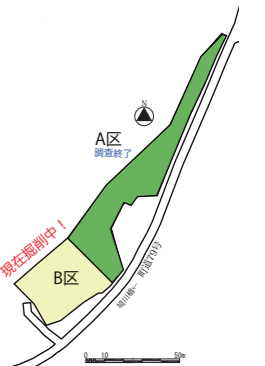


写真6 弥生土器の出土状況 南より



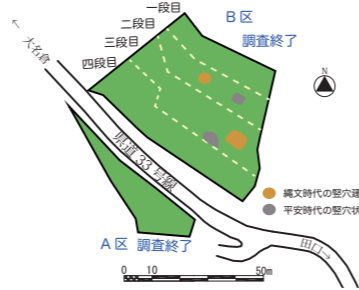
写真5 縄文時代晩期～弥生時代前期の竪穴状遺構 南西より



くるみくぼ 胡桃窪遺跡の調査

空中写真撮影を実施しました

胡桃窪遺跡の発掘調査は、十月二日に空中写真撮影(以下、空撮)を行い、その後は残りの調査を続けて無事完了しました。調査にご協力いただきまして、ありがとうございました。今回の空撮は、雨天の合間によりやく撮影できましたので感慨深いものであります。



さて、遺跡の空撮は発掘調査における一大イベントであります。これが行われるといよいよ発掘調査も大詰め。そのため、空撮が近づいてくると現場作業も緊迫感を増し、少しでも立派に写ってほしいと担当者は力が入ります。空撮写真は発掘調査の終了後に作成される「発掘調査報告書」でも必ず掲載されますので、その遺跡を表現できる写真でなくてはなりません。

空撮の写真に入れるべきポイントはいくつかありますが、「その遺跡を代表する遺構(竪穴建物跡など)が写っていること」、「立地がわかること」が重要とされています。そのため、遺跡の周囲も広く撮影できるように、ドローン等を用いて高い所から距離を置いて撮影します。通常の人間の視点では見えない場所からの撮影であるため、予想した以上に地形がわかる写真が撮影できました。(鈴木恵介)



写真7 大名倉遺跡上空より胡桃窪遺跡方向を撮影



写真8 胡桃窪遺跡と周辺の地形

そえざわ 添沢遺跡の調査

調査完了!

田口地区の添沢遺跡では十月半ば、現場での調査が完了しました(写真9)。

今年度の成果として、まずB区では、縄文時代早期(約九千年前)に遡る土器が出土したほか、状態の良い磨製石斧が出土しています。

一方のA区では、東西方向に伸びる自然の谷地形が検出され、そこからは縄文時代早期の土器、縄文時代後期～弥生時代初期の土器、非常に状態の良い磨製石斧、打製石斧などの石器、鉄鉢の可能性が有る鉄製品(写真10)、鉄滓、鎌倉時代～室町時代の山茶碗、中国産の青磁の破片など、様々な遺物が出土しました。残念ながら住居等の遺構はありませんでしたが、縄文時代や中世の集落が付近にあったものと思われれます。

今年度は現地での説明会は開催しませんでした。Web上でその成果を公表しています。ぜひご覧ください(図2)。(河嶋優輝)

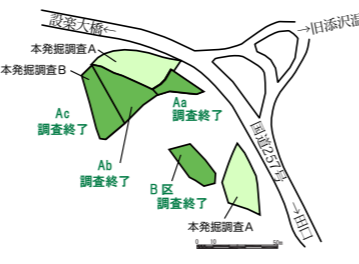


写真9 Ab区空撮写真(中央の帯状の暗い色が谷地形)



▲図2 YouTubeへのQRコード
愛知県埋蔵文化財センター公式チャンネル

◀写真10 Ac区谷地形内出土の鉄製品レントゲン写真(根元は先端まで残っているが、刃のある先端側は欠けており、鉄族と断定できない)

秋も深まってきましたが、いかがお過ごしでしょうか？
先月の下旬には、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の弥生時代の周堤のある住居跡とその周辺エリアの報道機関への現場公開を行いました。テレビ愛知や中日新聞社など多数の報道機関の方々にお越しいただき、取材していただきました。この結果、ニュース番組や多くの新聞で記事として取り上げられ、調査成果が全国に知らされることとなりました。大変、感謝しております。

展示されています！

設楽地区の土器たちも

No.58
令和2年
11月号

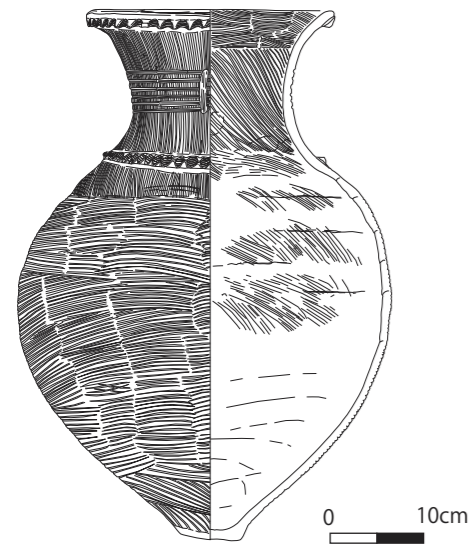


図1 笹平遺跡出土の条痕文土器の実測図

愛知県陶磁美術館特別展 / 愛知県埋蔵文化財センター埋蔵文化財展

YAYOI

モダンデザイン

—ニッポンの美、ここに始まる—
YAYOI: The Advent of Japanese Aesthetics

2020年
10月10日(土)~12月13日(日)

愛知県陶磁美術館 本館 第1展示室 第2展示室

愛知県埋蔵文化財センター 本館 第1展示室 第2展示室

愛知県陶磁美術館 セラミアム

<<展示概要>>
弥生の文化は、縄文とは対照的に機能性や普遍性を志向し、プロダクトの形や紋様は端正な造形をとることに特徴があります。こうした造形は、日本の伝統的な美の源流になると同時に、現在の私たちにとってもモダンと感じられます。

本展では、弥生時代の土器、石器、木器、骨角器、金属器の、かたち、色彩、絵画・紋様に焦点をあて、そのデザインや美を紹介します。近年の発掘調査によって出土した代表的な遺物が一堂に集まる貴重な機会であり、弥生時代を美とデザインの観点からとらえる、過去に類を見ない展覧会です。



写真1 愛知県陶磁美術館に展示中の設楽町の土器たち

田峯の銅鐸

図3は愛知県指定文化財となっている「田峯の銅鐸」で、現在豊川市一宮町の砥鹿神社に所蔵されています。銅鐸の収納箱の箱書きには天保二(1831)年に田峯(嶺)で掘り出され、その後の神社に奉納されたという記述があります。銅鐸は弥生時代に中国大陸から伝わった青銅器で、我が国で特有の発達をみせ、弥生時代の終わりとともに消えていく、弥生時代を代表する遺物のひとつです。田峯の銅鐸は高さ35.6センチ、裾部の径が16.1×11.2センチの大きさで、身には六区画された袈裟文が描かれています。形や文様などから、作られた時期は弥生時代後期初頭(紀元一世紀前半)頃と考えられます。また銅鐸は弥生時代後期後半には大型化して高さが一メートルを超えるものも現れますが、その頃近畿地方を中心に分布する「近畿式銅鐸」と、三河・遠江を中心に分布する「三遠式銅鐸」という二つのグループに分かれます(図4)。田峯の銅鐸は後者の「三遠式銅鐸」の特徴をいくつか備えており、「三遠式銅鐸」の前段階の様相を示す銅鐸として注目されます。

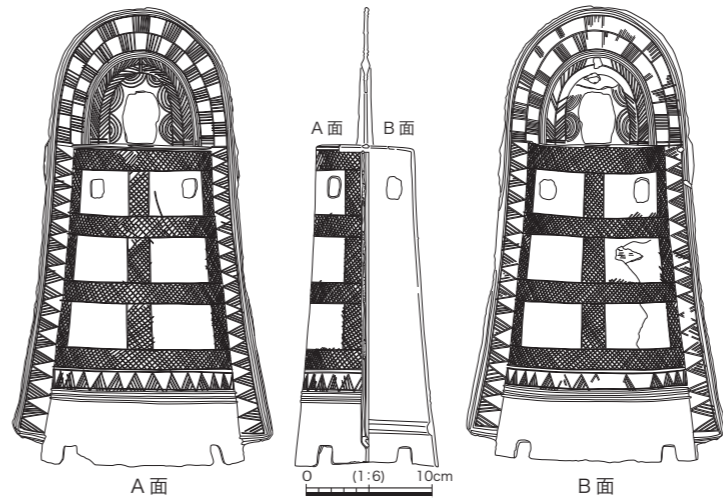


図3 田峯の銅鐸(文献内の図を一部改変)

設楽町では弥生時代前期には、縄文時代の影響を強く残す条痕文土器などの遺物や遺構が見つかっていますが、中期から後期にかけての遺物・遺構は少なく、今年度の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査を除けば設楽ダム関連調査でもわずかに出土しているのみです。それに対し銅鐸は、田峯の銅鐸以外にも設楽町周辺で四個が出土したとの伝承・記録が残っており、弥生時代の集落が希薄なこの地域になぜこれらの銅鐸が存在するのか?、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡との関連は?など興味は尽きません。(宮腰健司)

銅鐸模式図

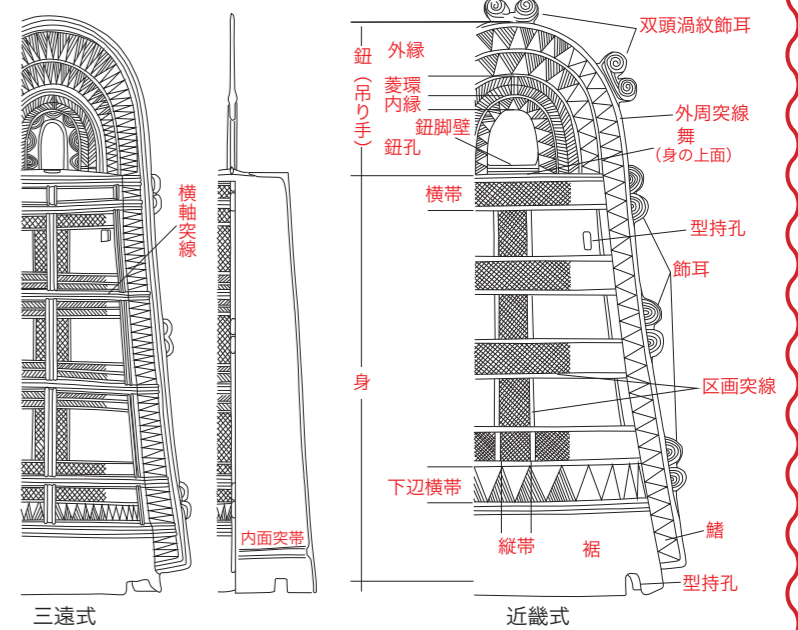


図4 銅鐸模式図(文献内の図を一部改変・加筆)

*引用文献
加藤安信 2003「第3章 集成 第1節 銅鐸」『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』